

有坂秀世博士の論文について

このたび、大修館書店より服部四郎・亀井孝・築島裕編『日本の言語学第七卷言語史』(一九八一年十一月)が出た。このうち、P、六二七―六五四に採録されている有坂秀世博士の「カールグレン氏の拗音説を評す」について、気になっていることを一言申しのべたい。

さて、P、六五四の「編注」によれば、この論文は『國語音韻史の研究』(昭和十九年、明世堂刊)による。「」ということである。

ところが、P、六四六の推定音価の表「(發聲) III. -uei, -yet, IV. -uei, -yet」のうち、III. -yei は、『國語音韻史の研究 増補』(三省堂、一九五七年十月)のみでみられるミス・プリントであって、『音聲學協會會報』第53號、明世堂刊『國語音韻史の研究』とも正しく -yei となっている。このことについては、すでに『中国語学』

第二二八号(一九八一年十一月)所載の拙稿「前史―石塚龍磨から有坂秀世まで―」で指摘した。また、拙稿の結びに引いた有坂博士の「追記」、「……。今回多少手を加へては見たものの、病氣の事とて力に限が有り、結局大した事は出来なかつた。……」の「力に限が有り」は、三省堂刊では「力に限りが有り」となっていて、これまた大修館刊と一致する。仮に以上の二点が偶然の一致であるとしても、P、六五三の「併し、古代の南方の或方言に於て青韻が拗音であつたとしても、その事實は、必ずしも、隋代頃の北方音に於てそれが直音であつたことを否定すべき決定的の根據にはなり得まいと思はれる。」のばあいは、どうであろうか。『音聲學協會會報』第58號、明世堂刊とも「……根據にはなり得ないと思はれる。」であつて(なお、「併」はとも「併」)、三省堂刊から「……なり得まい……」となつた。三省堂刊は、いくぶんなりとも、文意を改変してしまつたのである。

単なるミス・プリントであるのか、本来のものであるかの判断は、第三者にとって

容易ではない。訂正には慎重でなければならぬ。その点、読点の異同があることなどは、不注意なのか、限度をこえる主観的な判断か、のいずれかであるといつてよからう。

なお、大修館刊が三省堂刊によつていらしい根拠を、もう一つだけ示しておこう。

P、六四六（なほ、これに就いては、本書所載「漢字の朝鮮音について」三二三頁参照）。

P、六四八（止攝開口の場合の朝鮮音_ハについては、前掲拙稿三〇五頁を参照せられたし。）

P、六五一（本稿第一回三二八頁「本書……頁」参照）。

上記三点の参照頁数は、三省堂刊のそれであつて、明世堂刊では、それぞれ、三一四頁、二九七頁、三二〇頁でなければならぬ。

一方、独自のミスプリントもある。たとえば、

P、六三二 (㉒)……哇 (丘朔切) ^{△誤}▽

↓哇 (丘朔切) ^{△正}▽

P、六三三 (㉓)……共に仙韻合口群母

↓共に彌韻合口群母

P、六四二 ……緊 ing ↓……緊 king

P、六五三 ……之を_ハ型韻_ハienとなし、

↓……之を_ハ型韻_ハienとなし、 e t c .

とはいへ、明世堂刊によつたのか、三省堂刊によつたのかの詮議は、畢竟するに、二義的な問題である。要は、有坂博士の遺産を正確に伝えることであつて、少くとも正しいものを誤つて伝えることのないように切望するものである。